

## 小鼓 (薔薇に篠竹蒔絵鼓胴)

陶器のことをCHINAと呼ぶように、蒔絵製品のことをヨーロッパでJAPANと呼んだ、という話は、いささか実証性に欠けるとはいえ、ヨーロッパにおいて日本の蒔絵製品がひろく愛好されたことは間違いない。かのマリー＝アントワネット(1755-93)のコレクションにも、蒔絵により装飾された小箱がいくつも入っていたことが知られている。輸出された蒔絵製品は、もともとは手箱や化粧道具入れ、

あるいは硯箱などであったのだが、ヨーロッパでは本来の用途ではなく、宝石箱などに用いられていたようだ。金の美しい輝きが王侯貴族を魅了したのだろう。

蒔絵とは漆を用いた装飾の一ジャンルであり、さまざまな器物の表面に金銀の細粉を蒔いて付着させ、それにより文様を表現

する技法の総称である。起源は、正倉院の宝物に先駆的な例が見られることから、奈良時代までさかのぼることができる。漆自体は縄文時代から用いられているため、それに金銀で装飾するようになったのが、8世紀頃ということになる。

平安時代には、さまざまな蒔絵技法が登場し、それらが次第に洗練されていった。また、正倉院の宝物も含めて初期の蒔絵作品には金銀がほぼ併用されるが、やがて銀

の使用量は大きく減少することになる。これは産出量の問題でもあるが、銀が酸化して黒変することが次第にわかってきたからではないだろうか。平安時代末以降は、銀に替えて、貝殻を薄くスライスして貼り付ける螺鈿と呼ばれる技法と併用されるようになる。

平安時代初期には左右対称性が強い幾何学的な文様が多かったが、11世紀頃になると、自然景を再現

したような絵画的な文様も増えてくる。それと同時に、文様だけでなく「地」の部分にも金粉を蒔いて、より装飾性を高めることとなった。果物のナシの肌のように金粉を蒔く梨子地や金泥塗りと見間違えるほどに密に蒔いた沃懸地といった技法が、鎌倉時代から室町時代にかけて流行する。しかし、

小鼓(薔薇に篠竹蒔絵鼓胴) AN799

桃山時代に入ると一転して黒漆地を強調するような表現が多くなる。これらは、京都高台寺にある豊臣秀吉・北政所夫妻をまつる厨子にほどこされている黒漆地に金蒔絵という表現にちなんで高台寺蒔絵と呼ばれることがある。秀吉・北政所夫妻の厨子にはさまざまな蒔絵技法や意匠が用いられているために、高台寺蒔絵という語の定義も難しいが、いずれにしても、16世紀から17世紀にかけて黒漆地をいかした蒔絵作品が多く見られる。

美術工芸資料館所蔵の小鼓(薔薇に篠竹蒔絵鼓胴)の鼓胴部分は、上記のような16世紀から17世紀の蒔絵の流れを汲む技法で薔薇と篠竹が表現されている。蒔絵部分は、平蒔絵というシンプルな技法が基調であり、薔薇や篠竹の葉の一部には、本来地蒔きに用いられていた梨子地粉を用いた絵梨子地の技法が用いられている。このこともまた、16世紀から17世紀の特徴をよく示している。

薔薇・篠竹ともに、葉の部分はそれぞれ微妙に色味を変えている。この表現は、下地の漆の色合いや使用する金粉の純度により生じるもので、絵柄が単調にならないように意図的に変化をつけていることは明らかである。葉の葉脈には、あらかじめ金粉が付着しないような処理をしておく描割という技法を用いており、やはり、桃山時代から江戸時代前期の蒔絵としての特徴を示している。また、この時期に秋草をはじめとする植物文が多く見られるが、その点でもやはり、この作品はこの時代の特徴をよく示している。

以上の点から考えて、この鼓胴は、16世紀から17世紀前半を制作時期と考えることができる。ただし、同じような黒漆地に金の平蒔絵によるこの時期の作品のなかでは、色味の変化や斑入りの葉の表現など技巧的な面が目立つため、実際に制作されたのは17世紀に入ってから、つまり江戸時代前期の制作と考えるべきだろう。しかし、美術工芸資料館が所蔵する日本の漆芸品のなかで、制作時

期がほぼわかる資料としてはもっとも古い作品である。オーソックスで安定した技法と時代様式の明確な反映が見とれるため、制作地は京都であろう。

鼓の皮には使用跡が見られ、かなり使い込んだものであったことがわかる。皮の裏面の漆には破損箇所が見られるものの、各地に所蔵されている桃山時代から江戸時代にかけての小鼓の多くが皮を失って伝来していることを考えれば貴重である。

この小鼓は、明治36年(1903)2月23日に8円で図案科の資料として購入された。明治36年と言えば京都高等工芸学校が開校した翌年にあたり、わが国の伝統的な工芸品をもまた図案資料として用いていたことがわかる。アールヌーボーの全盛期であり、ヨーロッパのポスターや工芸の動向に目を向けがちな時期ではあるが、この時期の図案科がかならずしもヨーロッパだけに興味を向けていたわけ

ではないことを示す好例である。ちなみに、明治19年の小学校教員の初任給が8円、明治24年の巡査の初任給が8円という記録が残っている。それから推測すれば、さほど高価な購入品ということではなかったようである。

全長25.5cm、鼓径20.1cm。締め緒は当初のものとは思えないがしっかりと結ばれている。これにより、小鼓としての様子がよくわかる。購入時には「楽器」に区分されていた。

美術工芸資料館 館長 並木 誠士



小鼓(薔薇に篠竹蒔絵鼓胴)(部分)